

佐賀県における山間酪農について

藤崎 斌

(佐賀県農業試験場)

HUZISAKI, M.

On the Dairy Farming in Mountain Districts, Saga Prefecture

1. 県内に於ける山間酪農の現状について

酪農的には不毛に近かつた県下の山間地域に、昭和34年4月オーストラリアから、世界銀行借入金によつて、七山村に最初62頭のジャージー種が導入されたのに始まり、1年おくれで厳木町の天川部落や背振村にはいり、

その後富士、三瀬、大和にも徐々に拡大し、現在県下のジャージー種は約1,000頭弱を数えるようになった。

導入当初は「ジャージーの乳量は山羊程しかない」といわれ、その当時は輸入による輸送づかれや、環境の急変、飼育方法の不適正などの理由があつた。その後

第一表 佐賀県に於けるジャージー頭数

町 村 名	飼養農家戸数	飼 養 頭 数
背 振 村	59	319
七 山 村	70	212
富 士 村	54	131
三 瀬 村	38	87
大 和 町	31	86
厳 木 町	18	72
計	270	907

(注) 40.4.1県畜産課調

低能力牛の淘汰が進み、飼育方法も適切さを加えることによつて低滞気味であつた飼育頭数も、乳量の増大によつて最近では、上昇傾向を示すに至つた。

2. 山間地における林業との関係

山間地域の酪農経営を考える場合、どうしても林業との関係を無視する訳にはゆかない。酪農が放牧方式をとるにせよ、或は舎飼方式をとるにせよ、自給飼料の生産という面から山地の利用が計画されなければならない。

かかる面で山地の利用において、植林と酪農部門は直接的な競合関係を生ずる反面、林間放牧や下草利用では両者間に補合的な関係も成立する。山間における酪農がいかなる位置において成立し得るかは、そこに行われる耕種部門の生産と林業との関係を検討した上で、発展的な条件を備え得るかということであろう。

この意味から植林による山地利用の収益性を考えてみたい。

背振山間の富士村を中心とする地域の杉植林による産出量は、伐採令30年の場合、期待収穫材積はha当り約400m³と推定される。これに出材丸太の推定市場価格(昭和38年佐賀木材市場の平均値)より出材費(伐木、造材、搬出の費用)を差引いた立木単価で見ると、1ヘクタール当りの立木価額は次表のように約377万円となる。これが植林による30年間の粗収益である。

次に造林費を見ると(もちろん自家労働も評価する)造林補助金を差引いてha当り約11万円強、これに毎年の管理費を4,000円と見、年利6分で30年間の複利計算を行い、前の粗収益から差引き、30年間の年平均純収益を算出すれば次表の通りとなる。

第二表 植林による純収益 (ha当り)

立木価格	造林費+管理費 の複利計算額	純 収 益	年平均純収益
3,765,127	845,631	2,919,696	97,323

(注) 佐賀県林業試験場「昭和38年短期育成林業立木容度調査」結果の加工計算による。

以上のように計算すれば山地10a当純収益は約1万円程度と考えられる、もちろんこれは平均的な数値であるから当然に上下のブレが考えられる、例えばスギの生育の特に旺盛な七山の一地帯についてこのような計算を行なえば10a当り2万~3万円にも当るところもあり、そこでの酪農的利用は、高い機会費用となり酪農収益が如何に多くても林地からの転用はきわめて困難と見なければならぬ。

しかし酪農部門の収入が毎年極めて平均化しているのに対し林業収入は時期的に偏在し、年々の生活資金に困るという事情を考へての資金ぐりからは、高位林業収入地帯でも酪農的利用が勝っている訳である。

結局、山地の利用部門として酪農を考える場合、自給飼料の確保の面では広面積の山地をできるだけ利用したいが、林業収益を機会費用として考えればおのずと面積にも制限があり、耕地に比して低い収益性の山地においても単位面積当りの増収を図ることは依然として重要な意味をもっている。

3. 山間酪農経営の実態と問題点

ジャジー酪農家のうちで中堅的な10戸の経営について経営調査を行なったが、先づ第一に酪農所得の大きさを左右する搾乳量について見ると、成牛1頭当り搾乳量が3000kg以上に達したのは僅かに1戸であり、その農家では成牛1頭当り年間3691kgと高い生産量をあげ、飼育5頭中3頭は4000kgを突破しており、さらにその中の1頭は4935kgをあげ、乳量でもホルスタインにまけない高能力牛もいた。

平坦酪農の産乳量は大体、高温のため夏期に低下する傾向を示すが、山間酪農ではほとんどの場合、冬期に低下する傾向にあるのは自給飼料とくに乾草やサイレーチなどの貯蔵性飼料の調製の少なさによる粗飼料不足が大きくひびいているようである。

産乳量の多い農家と少ない農家について飼料給与状態を分析して見ると、ほとんどの場合TDN給与の過不足と一致する傾向を示している。

第三表 優秀ジャジー酪農家事例（七山村）昭和40.

農業従事者	酪農用地		飼育乳牛	
	改良牧野	飼料専用畑	成牛	育成牛
4名	300a	60a	8	4

酪農用建物施設

畜舎	納舎	歴肥舎	サイロ
21.0坪	15.0坪	4.5坪	8

酪農業用機械類

ミルクカー	尿散布機	耕耘機	カタ	モアー	トララー	発電機	單車
1	1	1	1	1	1	1	1

酪農労働時間

飼育管理	飼料作物	乾草調製	サイレーチ調製	計
2,470	750	150	150	3,520

飼料給与と関連して現在の改良牧野が大方は、家から遠距りにあり、このため酪農経営との結びつきが弱く、放牧方式の採用が不可能であるばかりでなく、採草労働に多くの時間を要し、草地の管理が不徹底となり、採草量を少くし、糞尿の有効利用がむずかしく、自給飼料の不足、濃厚飼料の多給となり、低所得の結果を招来する大きい原因になっている。

飼育管理労働時間をみると成牛5頭の飼育で大体成牛1頭当り500時間程度、放牧を行なった一部農家が300時間程度に減少している。

今後の山間酪農を確立するためには放牧方式が採用できる牧野の造成と牧野の維持管理技術、さらには放牧の方式についての研究が必要である。

片地が分散した状態にある牧野での現在の山間酪農には大きな発展はのぞめない。

酪農粗所得		
種類	生産量	価額
牛乳	22,921.6 kg	1,123,450
増殖額	♀ ♂ (育成牛4頭)	7,500 4,000 154,000
計	—	1,294,950

酪農経営費			
費目		金額	
雇自	備入飼料	賃料	—
諸建	材	肥料	164,504
農動	力畜	種子	7,500
家賃	料税	代費	18,334
租	の	費	7,800
そ	計	費	48,755
		費	83,575
		費	11,213
		費	45,468
		金	126,472
		課	29,580
		他	10,500
		計	553,701

(注) 肥料費の少いのは尿、糞の利用による。

酪農所得		成牛1頭当り	
酪農粗所得	1,294,950	酪農所得	92,656円
〃 経営費	553,701	乳量	2,865 kg
〃 所得	741,249	飼育労働時間	309時間